



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツクの人々の身体文化に関する研究：自然との共生関係の歴史
Author(s)	山村， 洋子
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16808号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16808
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99653
Type	doctoral thesis
File Information	YAMAMURA_Yoko_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：山村 洋子

学位論文題名

オホーツクの人々の身体文化に関する研究 ー自然との共生関係の歴史ー

本研究はオホーツクの人々の身体文化を自然との共生関係の歴史を通じて明らかにすることを目的とした。オホーツクの人々の暮らしは都市での利便性に満ちた生活とは異なり、自然の中で培われた生きがいや福利の創出とかわっていった。それゆえ、自然との共生関係の歴史を通じてオホーツク地域の身体文化を明らかにすることは、この地に生きる人々の生きがいの創出という新たな生活文化史の提示に繋がる。なお、関連する研究は次の四つの視点を重視してきた。即ち、1. 環境史および自然との共生や自然保護を巡る研究、2. 地域スポーツと生きがいに関する研究、3. 山岳スポーツ、登山についての研究、4. 都市と地方との視点からの研究である。中でも、キース・トマスは近代の自然との共生関係の歴史が人間中心主義的な自然保護理念に基づいてきたと主張し、さらに、ジェイムズ・ターナーは自然守護論 *preservation* と自然保護論 *conservation* を区別し、後者が人間による自然の管理を意味すると説いている。こうした研究視角は本研究がオホーツクにおける身体文化と自然との共生関係について論じる際に不可欠な視野を与えた。加えて、自然守護や自然保護といった二つの異なる自然との共生関係に関わる理念を往還する理念にも着眼した。即ち、民主主義は人間の中の身体的な出会いに根源があり、ローカル・アイデンティティの表象に身体文化が能動的に関与することを身体民主主義の概念を通して説き、且つ、合理的なエリートスポーツか平等的な大衆文化かといった二元論を草の根の実践が脱構築するという「身体文化の三元論」を提示したヘニング・アイヒベルクの研究であった。これらを踏まえることにより、以下に述べる方法論を通して論証した。

まず、第1章では、先に述べたトマスやターナー、アイヒベルクらの考えを整理し、トマスの『人間と自然界』の意義、ターナーの言う自然守護論と自然保護論をオホーツク地域の実情に即して捉え直し、加えて、アイヒベルクのいう身体民主主義、身体文化の三元論の視角についてもオホーツクの身体文化の土壌に照らして論じた。したがって、第1章は、次章以降で論じる自然の中での遊戯、身体民主主義の意義を踏まえて、結章での議論と接合させる役割を果たした（第1章 オホーツクにおける身体文化と近代における自然観の変遷）。

第2章では、斜里の人々がどのように自然保護の対象である知床の自然と共生関係を構築してきたのかについて、横関隆登が論じた「郷土風景」概念と対応する斜里山岳会の会報『知床』を基に分析し、記事内容に表象される斜里の郷土の人々と山、登山との関係を明らかにした（第2章 斜里山岳会会報『知床』にみる郷土の人々と山）。これにより、オホーツクの斜里という北海道の地方において継承される旧来的な登山文化が第3章で詳述する日本国内での山岳活動や自然との共生関係とどのように呼応するのかという視点を提示した。

第3章では、戦後、日本山岳会北海道支部と北海道山岳連盟（以下「道岳連」と略す）という二つの異なる地方組織の形成過程が自然保護の理念とどのように関わったのか日本山岳会、日本山岳協会（以下「日山協」と略す）、日本山岳会北海道支部と道岳連発行の記念誌、北海道体育協会史、日本山岳会発行の機関誌を用いて明らかにした。結果、日本山岳会北海道支部と道岳連の形成過程には組織間対立を生じさせていた自然保護を巡る理念の存在が明らかになった。以上のことは、戦前からの日本山岳会の指導者であり、また、日本における自然保護運動の牽引者であった武田久吉の影響が北海道では戦前戦後を通じて根強く、彼らが継承する独自の自然との共生関係を重視する登山文化の存在がオホーツクにも引き継がれていることを意味した。しかし、日本山岳会北海道支部と道岳連の両登山組織に、自然保護活動も自然の利活用も見られたことは二元論に収まらない矛盾を示していた。つまり、登山という身体文化によって自然と共存し、共感する喜びを育み、人は創造的かつ自主的になるという野外実践により実現される身体民主主義の優越はトマス、ターナーらのいう近代の分岐の折衷に繋がる（第3章 北海道の登山文化とは何か）。このことは、さらに高度で国際的な競技にまで移行したオホーツクのカーリングが直面する問題とも第4章で論じるように以下のようにかかわった。

第4章では、自然由来の氷上スポーツであり、近年、日本において注目されるに至ったオホーツク地域のカーリングの今日的展開について、ローカル・アイデンティティ形成の観点から論じた。具体的には、北海道カナダ協会がカーリング指導者講習会を開催した1980年からロコ・ソラーレ北見が平昌冬季五輪で銅メダルを獲得した2018年までを対象とし、その間に発行された『広報とことろ』、『広報とことろ通信』、『広報きたみ』のカーリングについての記述を分析した。結果、市町合併後、競技が高度化しても、素朴な面白さがカーリングの表象であり続け、「竹ぼうき」時代に由来するカーリング・レガシーがローカル・アイデンティティの形成に関与し、身体文化の関与を重視したアイヒベルクの論の例証に繋がった。また、近代スポーツらしい屋内競技となってもカーリングは氷上のゲームとして、氷上を掃き、石が滑るという自然の原理の内にあり、本研究が論じてきた自然由来の「遊戯的本質」をオホーツクのカーリングは基底に保ち続けていたことも明らかになった（第4章 オホーツク地域におけるローカルスポーツ―「竹ぼうき」から「ロコ・ソラーレ」へ―）。

結章、「身体文化を通じた自然との共生、その展望」では第4章までに論じてきたことを総括し、且つ、オホーツクの自然との共生関係の中にある身体文化の展望について論じた。つまり、オホーツクの自然由来の身体文化は、登山であれカーリングであれ、いずれも自然由来の野外活動として、自発的、創造的な機会を生む際の触媒として機能し、野外活動がもたらす人の自発性、創造性は草の根の活動を通して、身体民主主義をより実現させることを示すものであった。こうした結論は、高度に発達した近代社会の流儀をこれ以上後追いすることが、北海道の北東部に位置するオホーツクのような地域住民に真の豊かな未来をもたらすのかという問いに繋がった。本稿で論じた事例は、少なくともこうした未来を構想する余地がある時代を迎えていることを示していよう。よって、カーリングに象徴されるように、人々の素朴な自然由来の遊戯にこそ、オホーツクの人々のためのポストモダンのウェルネスの展望が託されている。